

大毛池田遺跡Ⅱ



東海北陸自動車道と大毛池田遺跡
(上；97年度調査区、下；96年度調査区)

例言

1. 本編は、愛知県一宮市大字大毛字池田、葉栗郡木曾川町黒田地内に所在する大毛池田遺跡（遺跡番号 02096：『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区）』1994）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県道萩原三条北方線建設にかかる事前調査として、愛知県土木部（当時、現愛知県建設部）より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査期間は平成8年11月から12月、平成9年11月で、調査面積はそれぞれ400 m²、150 m²である。
4. 調査担当者は、平成8年度一小泉渡（主査）、浅井厚視（調査研究員）、鈴木一（調査研究員）、平成9年度一大崎正敬（主査）、早野浩二（調査研究員）である。
5. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課（当時、現愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室）・愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部（当時、現愛知県建設部）、一宮市教育委員会
6. 報告書作成にかかる整理作業には、次の方々の助力を得た。
本多恵子、斎藤佳美（整理補助員）、山川和子、小崎暢子、岡田真知子（整理作業員）
なお、出土遺物の写真撮影については深川進氏の手を煩わせた。
7. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
S K；土坑、S D；溝、S T；耕作地、S B；建物、N R；自然流路
8. 発掘調査及び本書で使用した座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。
9. 本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
10. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
12. 本編の編集・執筆は早野浩二が担当した。

目次

第1章 調査の概要	1
(1) 調査の経緯と経過	1
(2) 周辺の環境	2
第2章 遺構と遺物	4
(1) 基本層序と時期区分	4
(2) 古墳時代の遺構と遺物	4
(3) 古代の遺構と遺物	6
(4) 中世の遺構と遺物	8
第3章 まとめ	10

別表 遺構一覧表 / 遺物一覧表

図版 基本遺構図 / 写真図版

別表・図版目次

<別表>

遺構一覧表

遺物一覧表

<基本遺構図>

図版 1 調査区配置図 (1:2500)

図版 2 調査区全体図・割付図 (1:500)

図版 3 上面基本遺構図 (1:200)

図版 4 下面基本遺構図 (1:200)

<写真図版>

図版 5 96区

図版 6 97区

図版 7 遺物写真

挿図目次

第1図 大毛池田遺跡の位置 (1:20万)

第2図 大毛池田遺跡と旧河川の位置

第3図 大毛池田遺跡と周辺の遺跡 (1:2.5万)

第4図 97区窪地土層断面図 (1:80)

第5図 古墳時代遺物実測図 (1:4)

第6図 96 A a区西半竪穴住居平面・土層断面図 (1:80)

第7図 97 S B 01平面・土層断面図 (1:40)

第8図 古代遺物実測図 (1:4)

第9図 96 A b S D 02土層断面図

第10図 中世遺物実測図 (1:4、1:3)

調査区全体主要遺構配置図/古墳 (1:2000)

調査区全体主要遺構配置図/古代 (1:2000)

調査区全体主要遺構配置図/中世 (1:2000)

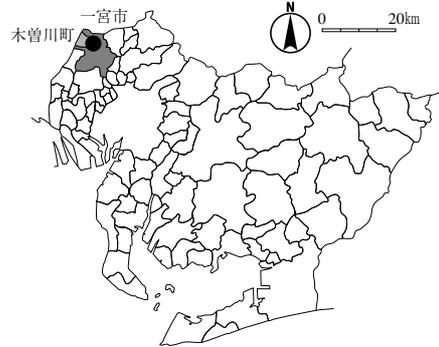


第1章 調査の概要

(1) 調査の経緯と経過

大毛池田遺跡は愛知県の北西端、一宮市大字大毛字池田および葉栗郡木曾川町黒田にかけて広がる古墳時代から中世の集落遺跡である。遺跡周辺の現況は水田地帯が主で、畑地や住宅地がそのなかに点在している。なお、遺跡周辺の標高は9.0m前後である。

遺跡近辺にはJR東海道本線、名鉄名古屋本線、国道22号線、東海北陸自動車道が縦貫し、当地域がわが国の交通動脈の基幹となるべき位置を占めている



第1図 大毛池田遺跡の位置（1：20万）

ることを明確に示している。なお、本遺跡をはじめ、隣接する大毛沖遺跡、門間沼遺跡、田所遺跡は東海北陸自動車道建設に先立って発掘調査が実施された遺跡である。本遺跡については一宮・木曾川インターチェンジの予定地内全面にあたる41300㎡の発掘調査が平成5年度から平成7年度にかけて実施された。その結果、発掘調査当時、愛知県内では初見となった古墳時代の水田跡や、古代の大治水事業の痕跡と考えられる大溝、大規模な区画を伴った中世の屋敷地などを検出した。その成果は平成9年に刊行された発掘調査報告書にまとめられ、尾張北部の地域史、木曾川をめぐっての開発史などに欠くべからざる資料として広く活用されている。

さて、今回の調査は一宮市北部を東西に横断する県道萩原三条北方線の建設にともなうもので、愛知県土木部（当時、現愛知県建設部）より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）が平成8年度11～12月に400㎡（96区）、平成9年度11月に150㎡（97区）、計550㎡の発掘調査を実施した。今回の調査区は93A区の西、94Ab区の北西、95E区の北東に相当する。なお、96区は廃土処理などを考慮したうえで、Aa区（100㎡）、Ab区（300㎡）に調査区を分割し、またAa区は調査区設定上の制約から、さらに二分割した。

今回の発掘調査は、周辺一帯に展開する古墳時代の水田跡の一部分、平安時代の竪穴住居群、中世の大溝などを検出したことが成果として挙げられる。これらの調査成果は従前の成果に追加される性格ではあるものの、幾つかの重要な知見も得られている。

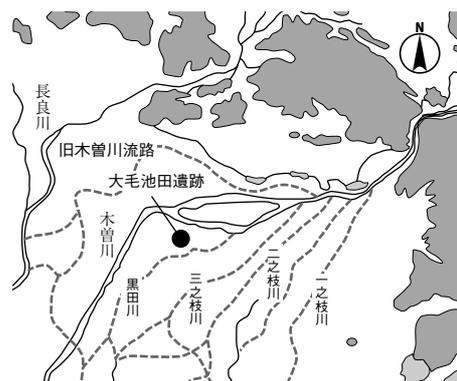
文献

- 武部真木編 1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 浅井厚視・鈴木一 1997「大毛池田遺跡」『年報』平成8年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 早野浩二 1998「大毛池田遺跡」『年報』平成9年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

(2) 周辺の環境

1、地形・地質

濃尾平野はわが国第三位の広大な面積を保する平野である。とくに木曽川を隔てた左岸域（愛知県側）の沖積平野面は尾張平野とも呼ばれ、その主要部は木曽川の分流派による夥しい堆積、第四紀沖積層に覆われている。大毛池田遺跡は沖積平野面の扇状地帯から自然堤防帯へと移り変わる境界付近に位置する遺跡で、現地表面での標高は9.0 m前後を測る。



第2図 大毛池田遺跡と旧河川の位置

遺跡の周辺には、かつては黒田川をはじめとする幾筋もの河川が網目のように北東から南西方向に沿って流れ下っていたようで、河川上流から運ばれた大量の土砂は自然堤防といった微高地を生み出した。130000m²を超す広大な面積の調査区が設定された大毛地区とその周辺の遺跡も、例外なく自然堤防状微高地と後背湿地が複雑に入り組む地形に立地している。これらの遺跡が生まれて以来、幾度の洪水を経ながらも微高地上は居住に、低平な場所は水田に供される景観を眺めることができたものとみられる。しかし、現在は東海北陸自動車と一宮・木曽川インターチェンジの開設などともなっており、土地利用のあり方も大きく変化している。

2、周辺の遺跡

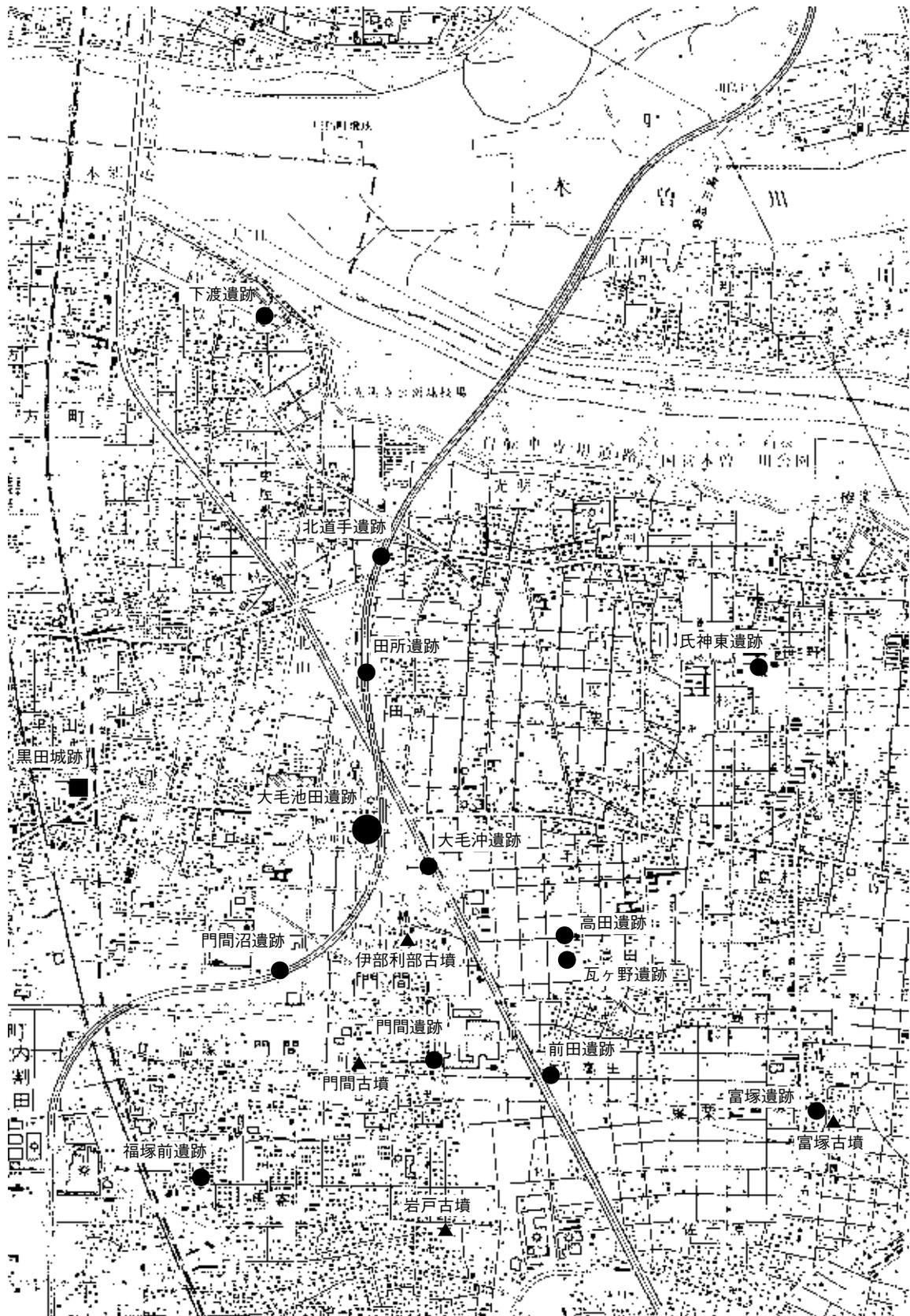
大毛池田遺跡の周辺、一宮市北部、葉栗郡木曽川町には北から北道手遺跡、田所遺跡、大毛沖遺跡、門間沼遺跡などの集落遺跡が存在する。これらは東海北陸自動車道の建設ともなっており、発掘調査が実施された遺跡で、報告書刊行までも含めた調査がすでに完了している。また伊富利部神社古墳、宇夫須那神社古墳、富塚古墳などの古墳時代後・終末期を前後するとみられる中小の古墳も遺跡周辺には散見され、門間沼遺跡、大毛池田遺跡の発掘調査では埋没した古墳も見られている。

大毛地区の大毛沖遺跡は大毛池田遺跡とは旧流路を挟んで位置する遺跡で、古代の流路跡とその両岸の集落域、護岸にかかわる施設などが検出されている。また流路に平行して何条もの大規模な溝が掘削され、それらは大毛池田遺跡に連続する。南に接する門間沼遺跡では大毛池田遺跡から連続する古墳時代前期の水田跡が調査されており、両遺跡を含めて確認された水田域は南北約800 m、東西約600 mにも及ぶことが判明している。

上の遺跡らは大毛池田遺跡とは時代こそ違えつつも一体として推移しており、地域が具体的に移り変わるさまが、私どもが考える遺跡の枠組みの認識とはある意味では大きく異なっているものであることをよく表している。

文献

- 永井宏幸編 1996『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鬼頭剛 1997「Ⅱ遺跡の概要 1 位置と地理的環境」『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人編 1999『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター



(国土地理院発行 1:25000地形図「岐阜」、「一宮」)

第3図 大毛池田遺跡と周辺の遺跡 (1:2.5万)

第2章 遺構と遺物

(1) 基本層序と時期区分

96、97年度調査区における基本的な層序は上位の堆積物より第1層－中粒砂混じり灰色シルト層、第2層－灰色シルト層、第3層－灰白色極細粒砂層、第4層－灰褐色粘土層、第5層－暗紫色粘土層、第6層－淡黄色粘土層、第7層－灰白色粗粒砂層となる。これらは周辺の調査区に通有の層序で、既報告における「第1層～第7層」、あるいは「7つのユニット」に対応する。今回の調査区では第1層、あるいは第2層の上面（標高8.3～8.5m）で、古代と中世の遺構を、第5層の上面（標高7.7m）で古墳時代の遺構を検出した。

なお、本報告においては既報告（大毛沖・大毛池田遺跡）で使用された時期区分、古墳Ⅰ期～Ⅲ期、古代Ⅰ期～Ⅳ期、中世Ⅰ期～Ⅳ期、を踏襲して記述をおこなう。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

1、遺構

第5層水田

第5層（暗紫色粘土層）の上面で平面精査を行った結果、古墳時代前期に属す水田跡を検出した。検出した水田跡は96A a区で16枚（ST01～16）、96A b区（ST01～12）で12枚、97区で7枚（ST101～107）でいずれも小区画水田である。第5層水田の作土は上位の第4層水田における連続耕起によってすでに失われた状態で、その認定はきわめて困難であった。また畦畔の起伏も土層の圧密化もあって、積極的に認識できるものではなかった。すなわち、実際には微視的に捉えうる色調の差異によって畦畔を識別し、水田区画（の痕跡）を検出したことになる。



97区第5層水田の畦畔

水田区画は基本となる北東から南西方向の方向性を踏襲するが、より南北方向に近い傾向にある。これは調査区南東に近接する94A b区などの方向性よりも調査区北東に近接する93A区の方

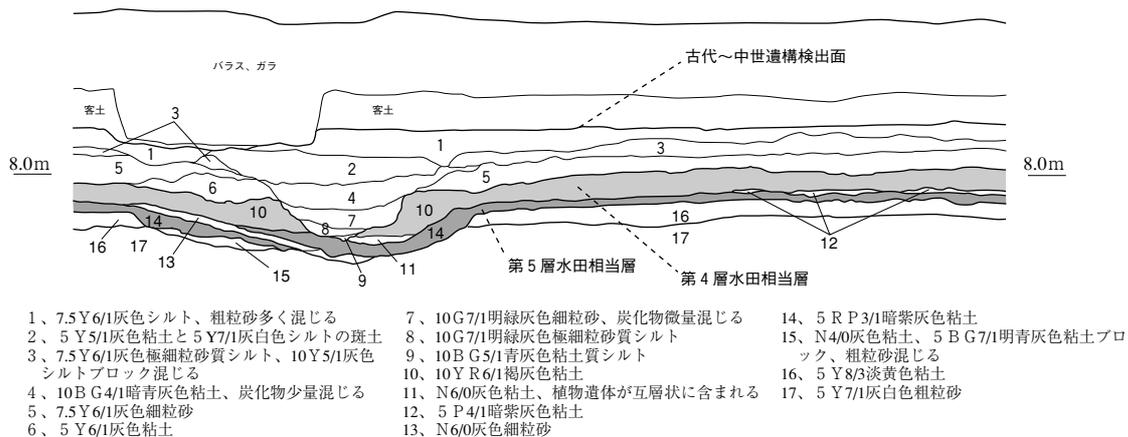
方向性に近似する。つまり、96、97区付近は水田区画の方向性が微妙に変移する地点に相当することが理解される。

第4層水田

第4層水田の作土に相当する第4層（灰褐色粘土）は96、97区で認められた。ただし、第4層水田が灰白色極細粒砂層によって被覆されるいわゆる埋没水田であるにもかかわらず、土層断面の観察によっても畦畔は確認されなかった。これらから96、97区に第4層水田は及んでいたものの、水田を区画する畦畔は存在していなかったものと判断される。

窪地

96、97区において北東から南西方向の溝状の窪地が確認された（96A a SD04・97 NR01）。この窪地は第5層が下位の第6、7層を切り込み、標高7.1m付近まで落ち込むことによって形



第4図 97区窪地土層断面図 (1:80)

成されたもので、下層は植物遺体が互層状に含まれる粘土によって埋積されている (第4図)。

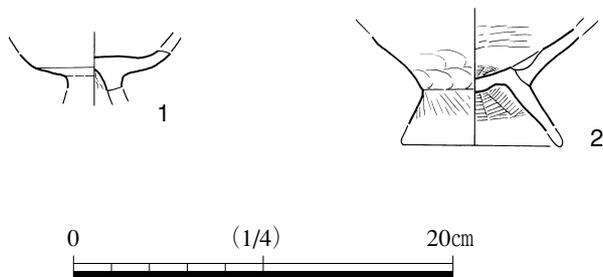
また、この窪地を界して以東の水田面が以西の水田面よりも約20cm高くなっていることが注意される。これは94Ab区東部分でみられた大畔と窪地付近の状況と類似しており、地形の制約を受けて水配りの方法にも何らかの考慮が及んでいた可能性を想定する必要もあろう。96、97区においては、窪地以西で水田区画が比較的整っていることに対して、以東では水田区画が整っていないか、著しく小さかったりする傾向に関係するものとも考えられようか。

2、遺物

96Aa区の第5層水田を精査する過程で、2点の土師器が出土した。1は小型の有稜高杯で、廻間I～II式に相当しよう。胎土は精良なもの、焼成はあまく、断面黒色層を形成する。2は台付甕の脚部で時期を明確にしがたいが、松河戸式の範疇で考えておきたい。表面の風化が著しい。

文献

- 松井健 1987「水田土壌学の考古学への応用—ケース・スタディと提言」『土壌学と考古学』博友社
 武部真木 1997「古墳時代」『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター



第5図 古墳時代遺物実測図 (1:4)

(3) 古代の遺構と遺物

1、遺構

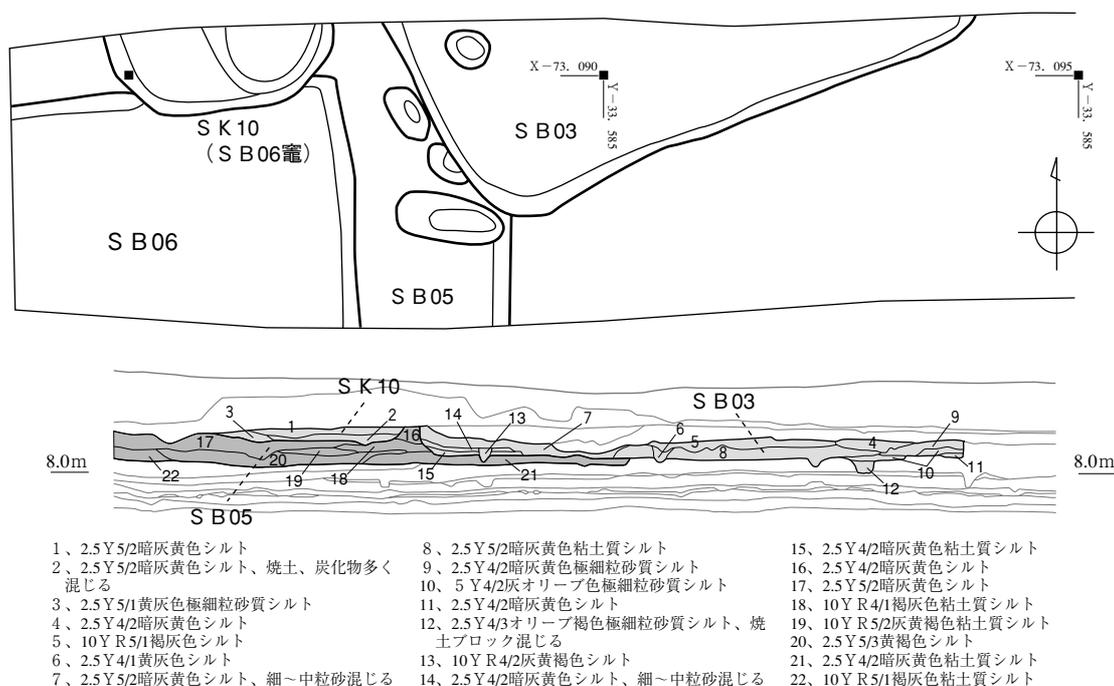
竪穴住居 96 A a 区で6棟 (S B 01～S B 06)、97区で1棟 (S B 01) を認定した。96 A a 区では標高8.4m前後が古代 (中世) の遺構検出面となるため、遺構の残存は比較的良好であるが (第6図)、97区では調査区全体が中世の段階に標高8.2m前後まで削平されるため、古代の遺構の残存は良好でない。調査区の制約や遺構の重複から、平面の全形については未詳であるものの、96 A a 区の竪穴住居の平面形は一辺5m前後の方形が想定される。なお、遺構検出面から床面までの深さは20cm前後となる。

96 A a S B 06 96 A a S B 06 (第6図) は住居の北辺に竈 (S K 10) が付設される。竈は土坑状に大きく掘り込まれた形状として認識できるのみで、掘り込みの内部には焼土と炭化物が濃密に認められた。竈部分と竪穴住居の埋土からは9世紀後半の土師器甕がそれぞれ出土した。

97 S B 01 大部分が今回の調査区外にあたるため平面形は不明。住居の東辺に付設された竈の残存部分を確認したのみ (第7図)。竈は多量の焼土塊と炭化物、数点の被熱した拳大の円礫 (濃飛流紋岩) をともなう掘り込みとして検出できた。10世紀前半の灰釉陶器と、土師器甕が一括出土した。

2、遺物

3は96 A a S B 04付近の小土坑96 A a S K 09から出土した甕。口縁端部を内側に折り返す特長などから、いわゆる伊勢系甕の範疇で考えられる。9世紀後半～10世紀前半。4は96 A a S B 05から出土した広口丸底の器形となる鍋の把手部分。5は96 A a S K 10から出土した。いわゆる伊勢系甕で、やや肩の張った体部が球胴に近い器形が想定される。9世紀後半～10世紀前半。6は96 A a S B 06から出土した甕で、口縁部は屈曲し、口縁端部は平坦に仕上げる。体



第6図 96 A a 区西半竪穴住居平面・土層断面図 (1:80)

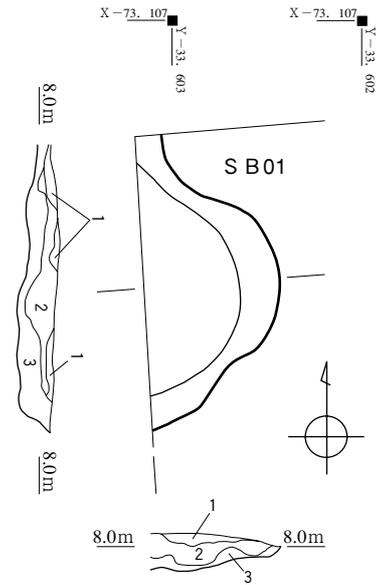
部外面には粗いハケ調整を施す。いわゆる濃尾系甕で、9世紀後半～10世紀後半。

7～9は遺構外から出土した須恵器。7は96A a区西半の竪穴住居付近から出土した。口縁部外面の先端付近が明瞭に窪み、体部はロクロ調整による条線が目立つ。黒笹14号窯式併行で9世紀前半。8、9は96A b S D 02 (中世) に混入したもので同じく9世紀前半頃。

10～15は97 S B 01から一括出土した。10は灰釉が漬け掛けされる皿。折戸53号窯式で10世紀前半。14、15は濃尾系甕で、口縁端部を平坦に仕上げたもの。

文献

植崎彰一 1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会
 城ヶ谷和広 1991「古代尾張の土師器～6世紀後半から11世紀の様相～」『年報』平成8年度財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 永井宏幸 1996「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会



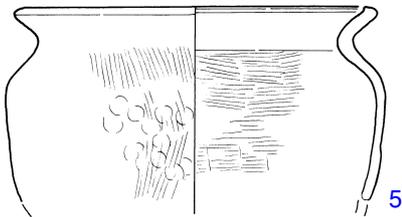
1、10Y R5/1褐灰色シルト
 2、10Y R5/1褐灰色シルト、焼土塊と炭化物を大量に含む
 3、10Y R5/1褐灰色シルト、炭化物を少量含む

第7図 97 S B 01 平面・土層断面図 (1:40)

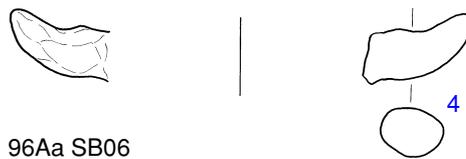
96Aa SK09



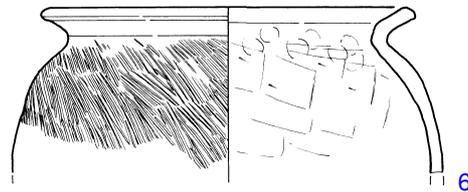
96Aa SK10



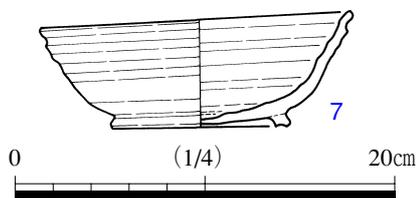
96Aa SB05



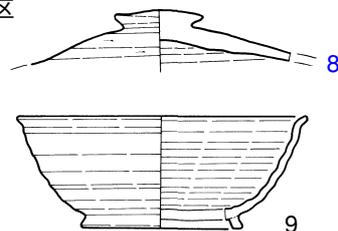
96Aa SB06



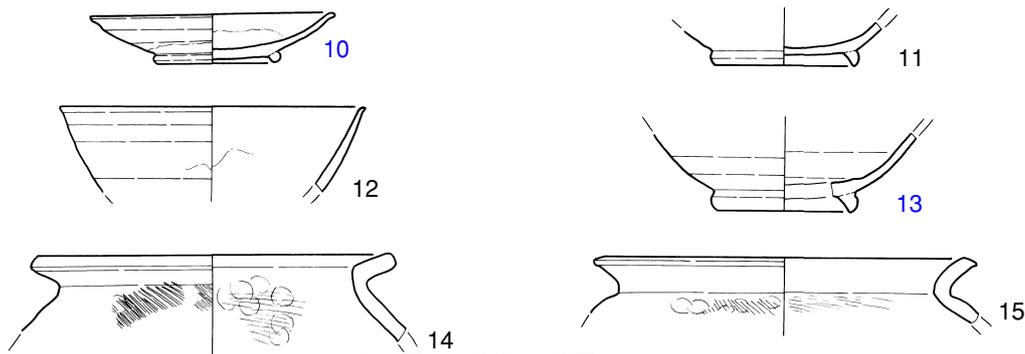
96Aa 区



96Ab 区



97SB01



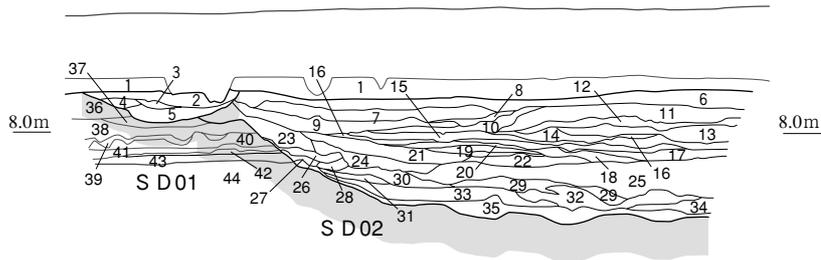
第8図 古代遺物実測図 (1:4)

(4) 中世の遺構と遺物

1、遺構

中世の遺構は本遺跡に普遍的に分布するが、今回の調査区は狭小であったため、遺構の全体像を把握するのは困難であった。出土遺物も細片が多い。

- 96 A a 96 A a 区の東端付近を平行して北東から南西方向に通じる溝。93 A S D 03・04 と同一の溝で S D 01・02 ある可能性が考えられる。15 世紀前半の古瀬戸灰釉陶器縁釉皿などが出土した。
- 96 A a S K 02 検出面での径が約 4 m を測るやや大型の土坑で、北半部分を検出した。構造物は何ら認められなかったものの、井戸の可能性が高い。15 世紀後半の東濃型灰釉系陶器椀などが出土した。
- 96 A b S D 02 95 E S D 05、94 F S D 18、93 B S D 02 に通じる溝（第 9 図）。現在の一宮市と木曾川町の市町境となる水路に平行する溝で中世には大毛と黒田の「境掘」として機能していた可能性が考えられる。他の調査区同様、出土遺物はごく少量で、細片がほとんどである。
- 97 S D 01 北西から南東方向に通じる溝として検出されたが、南側の立ち上がりが明確なのに比して北側の立ち上がりは緩慢であることから、大きく削平された痕跡とも考えられる。12 世紀後半の尾張型灰釉系陶器椀 1 点が出土した。



- | | | |
|---|---|---|
| 1、2.5 Y 4/3 オリーブ褐色シルト | 18、2.5 Y 5/5 黄褐色粗粒砂、極細粒砂質シルトブロック混じる | 33、5 Y 4/1 灰色シルト質粘土と 5 Y 4/2 灰オリーブ色シルト質粘土 |
| 2、2.5 Y 4/2 暗灰黄色極細粒砂質シルト、炭化物少量混じる | 19、2.5 Y 4/1 黄灰色シルト | 34、7.5 Y 4/1 灰色粘土質シルトと 5 Y 4/1 灰色シルト質極細粒砂 |
| 3、2.5 Y 4/2 暗灰黄色極細粒砂質シルト | 20、2.5 Y 5/2 暗黄灰色シルト質極細粒砂 | 35、10 Y 6/1 灰色粘土ブロックと 10 Y R 3/1 黒褐色粘土ブロックと 2.5 Y 5/3 黄褐色と 2.5 Y 5/4 黄褐色中粒砂 |
| 4、2.5 Y 5/2 暗灰黄色極細粒砂質シルト | 21、5 Y 4/1 灰色粘土質シルトと 5 Y 4/1 灰色極細粒砂質シルト | 36、2.5 Y 5/3 黄褐色極細粒砂質シルト |
| 5、2.5 Y 4/2 暗灰黄色粘土質シルト、2.5 Y 5/3 黄褐色シルトブロック斑入 | 22、5 Y 4/1 シルト質粘土と 5 Y 4/2 灰オリーブ色極細粒砂質シルト、2.5 Y 5/4 黄褐色中粒砂がレンズ状に混じる | 37、2.5 Y 5/3 黄褐色シルト |
| 6、2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト | 23、2.5 Y 4/2 暗灰黄色粘土質シルト | 38、2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂 |
| 7、2.5 Y 4/2 暗灰黄色極細粒砂質シルト | 24、5 Y 4/1 灰色粘土質シルト | 39、2.5 Y 5/3 黄褐色粘土質シルト |
| 8、2.5 Y 4/2 暗灰黄色粘土質シルト | 25、5 Y 6/1 灰色中粒砂と 5 Y 4/1 灰色シルト質粘土と 5 Y 4/1 灰色シルト質極細粒砂 | 40、10 Y R 5/1 褐灰色粘土 |
| 9、2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルト | 26、7.5 Y 4/1 灰色粘土質シルト | 41、10 Y R 4/1 褐灰色粘土 |
| 10、2.5 Y 5/2 暗灰黄色極細粒砂質シルト | 27、5 Y 3/1 オリーブ黒色粘土 | 42、10 Y R 3/1 黒褐色粘土 |
| 11、5 Y 4/2 灰オリーブ色シルト | 28、5 Y 4/1 灰色シルト質粘土 | 43、7.5 Y 6/1 灰色粘土 |
| 12、5 Y 4/2 灰オリーブ色極細粒砂質シルト、粗粒砂混じる | 29、2.5 Y 5/3 黄褐色細～中粒砂、2.5 Y 4/1 黄灰色シルトブロック混じる | 44、2.5 Y 5/4 粗粒砂 |
| 13、5 Y 4/1 灰色極細粒砂質シルト | 30、5 Y 4/1 灰色シルト質粘土、7.5 Y 4/1 灰色シルトブロック混じる | |
| 14、5 Y 4/2 灰オリーブ色極細粒砂質シルト | 31、5 Y 4/1 灰色シルト | |
| 15、2.5 Y 4/2 暗灰黄色シルト質粘土 | 32、2.5 Y 4/1 黄灰色粘土と 2.5 Y 5/1 黄灰色シルト質粘土と 5 Y 5/1 灰色シルトの互層 | |
| 16、5 Y 5/2 灰オリーブ色シルト | | |
| 17、2.5 Y 4/1 黄灰色粘土質シルト、2.5 Y 5/2 暗灰黄色細～中粒砂混じる | | |

第 9 図 96 A b S D 02 土層断面図 (1 : 80)

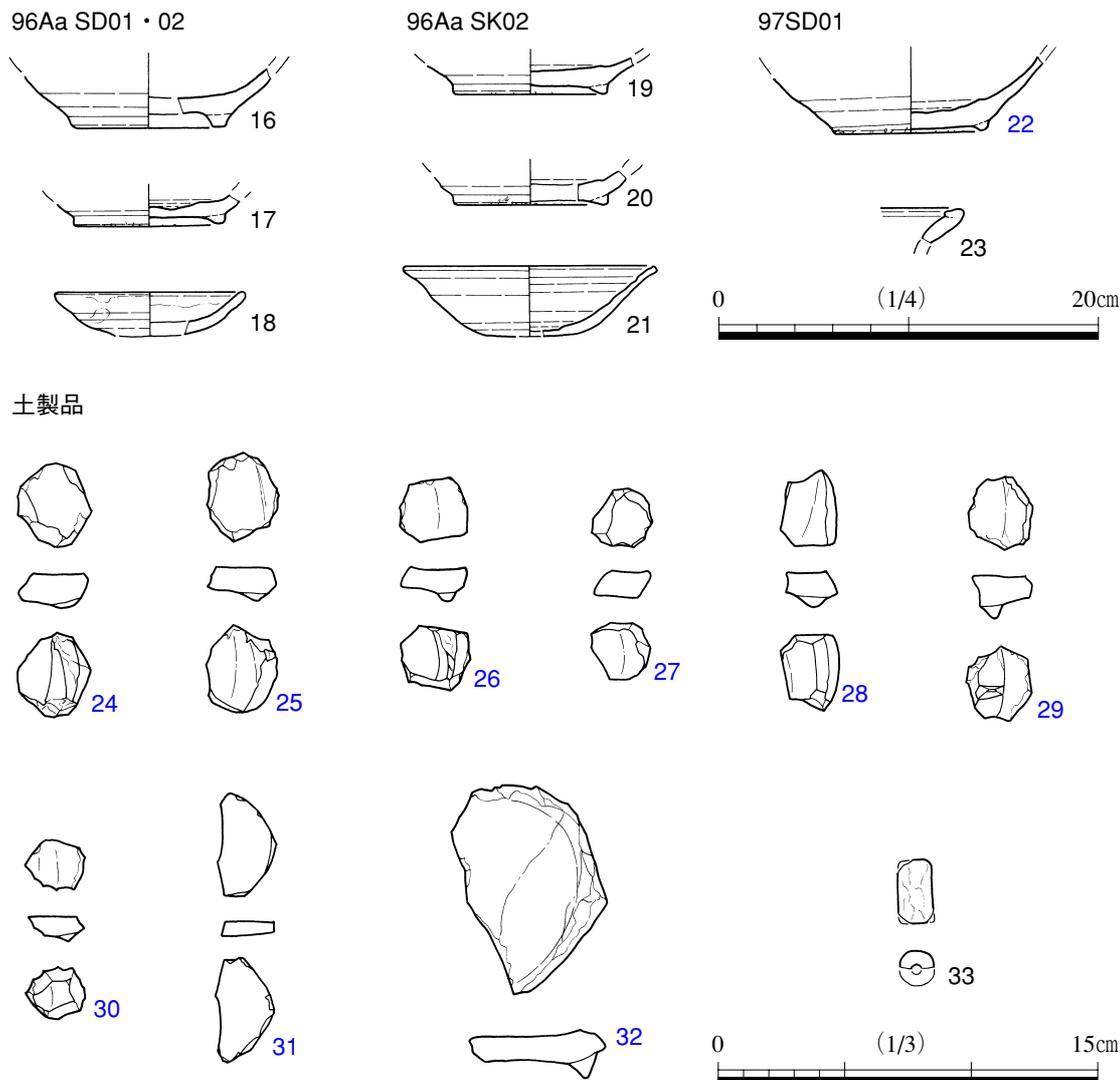
2、遺物

16～18は96A a S D 01から出土した陶器。かなりの時期幅が見込まれる。16は10世紀後半から11世紀の美濃系の灰釉陶器椀、17は尾張型の灰釉系陶器椀で、藤沢編年第5型式新段階。18は古瀬戸灰釉陶器縁釉皿で後Ⅲ期。19～21は96A a S K 02から出土した。19、20は藤沢編年第5型式新段階～第6型式の尾張型の灰釉系陶器椀。21は東濃型の灰釉系陶器椀で脇之島窯期。22、23は97 S D 01出土。22は藤沢編年第5型式古段階の灰釉系陶器椀。底部外面には墨書が認められるが判読不能。23は土師器伊勢型鍋の口縁部片。

24～31は灰釉系陶器を意図的に打ち欠いて製作したいわゆる加工円盤。31が東濃型の灰釉系陶器皿の底部を用いている以外は、いずれも尾張型灰釉系陶器椀の高台付近を用いている。32は内面に墨痕が認められる灰釉系陶器椀で、転用硯として用いた可能性がある。33は土錘。

文献

藤澤良祐 1991「古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 X』瀬戸市歴史民俗資料館
 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター



第10図 中世遺物実測図（16～23は1：4、24～33は1：3）

第3章 まとめ

既報告の成果と対比しつつ今回の調査成果を時代ごとに概括し、本報告のまとめとする。

古墳時代（古墳Ⅰ期～古墳Ⅲ期）

大毛池田遺跡、門間沼遺跡にかけて広く展開する古墳時代水田の一角を調査した。ただし今回の調査区は狭小であるため、水田区画の配置などの全体像を構築するための材料はあまりに乏しい。しかしながら、今回の調査区が水田区画の方向性が微妙に変化する地点に相当すること、また水田が窪地を境して比高差をもつことなどの知見が新たに得られた。これらは水田と周辺地形との関係を整合させるうえで軽視できないものである。

古代（古代Ⅲ・Ⅳ期）

竪穴住居からなる集落域が今回の調査区付近に及んでいたことが明らかとなった。これらは古代Ⅲ期から古代Ⅳ期、9世紀～10世紀前半に属するもので、大毛池田遺跡においては遺構数、あるいは開発行為そのものが収束していく時期に相当する。前回の調査では認識がやや困難であった時期でもあることから、大毛沖遺跡を含めた遺跡の変遷過程に若干の再考を促す結果となった。また竪穴住居からは比較的まとまった土師器煮炊具の土器資料も得られている。

中世（中世Ⅰ期～中世Ⅳ期）

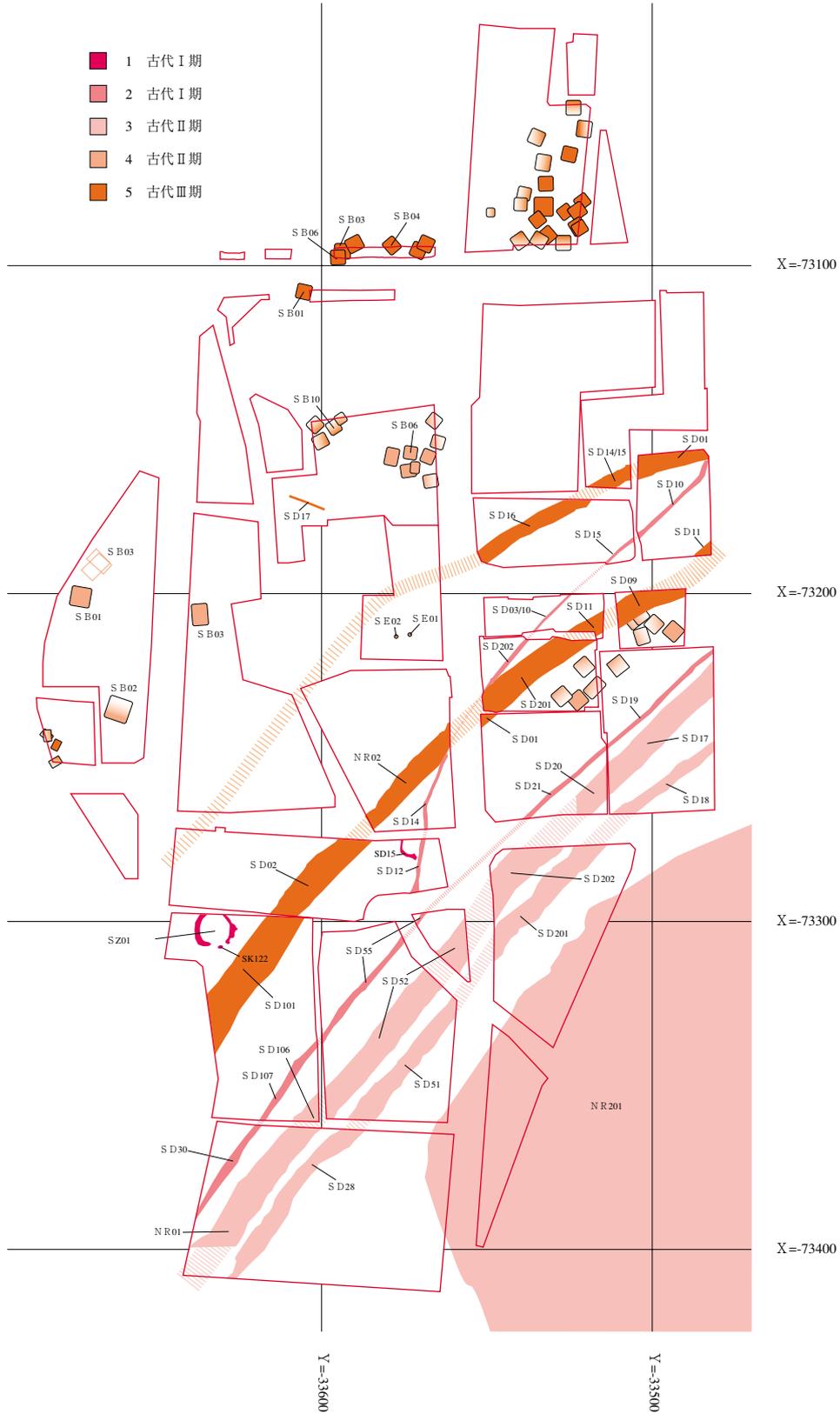
中世の遺構は充実の度合いが低い。またそのいずれも、出土遺物が希薄であるうえ時期としてのまとまりを有さないことから、中世大毛集落の変移過程との厳密な対比を困難としている。前回の調査成果を踏まえるなら、中世Ⅰ期、11世紀後半～12世紀に中世遺構が展開しはじめ、屋敷地区画が15世紀のうちにほぼ収束する動態に対応するものと考えておく。

ここに公としたのは、東海北陸自走車道建設に先立って大毛地区で発掘調査された面積の0.5%にも届かない、しかも多くの制約を負っての調査の報告である。その内容もこれまでの調査成果を統合する内容には程遠く、遺跡の像にいたずらに上塗りする結果のものとなった。これは調査担当の内的な問題に帰せられる部分がほとんどであろうが、全体の事業計画にも問題がなかったとは言えまい。いま、私どもが遺跡に向き合う姿勢そのものを真摯に問い直す必要があるだろう。

大毛池田遺跡 93,94,95,96,97年度 調査区全体主要遺構配置図 / 古墳



大毛池田遺跡 93,94,95,96,97年度 調査全体主要遺構配置図/古代



遺構一覽表

調査区	遺構	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	備考
96A a	S D01	I E19 g - I E20 g	残320	残175	98		93A S D03
96A a	S D02	I E19 g - I E20 f	残350	70	22		93A S D04
96A a	S B01	I E19 f - I E20 g	残505	残215	23		住居内小土坑 2
96A a	S B02	I E19 f - I E20 g	520	残230	15		住居内小土坑 3
96A a	S B03	I E19 b - I E20 c	残560	残265	23		住居内小土坑 1
96A a	S B04	I E19 d - I E20 e			1		
96A a	S B05	I E19 b - I E20 b			19		住居内小土坑 3
96A a	S B06	I E20 a - I E20 b	残360	残270	15		
96A a	S K01	I E20 e - I E20 f	残595	残185	19		竈
96A a	S K02	I E20 d - I E20 e	残400	残110	84		井戸
96A a	S K03						
96A a	S K04	I E20 d			5		
96A a	S K05	I E20 d	残170	残40	3		
96A a	S K06	I E19 e	90	残40	3		
96A a	S K07	I E20 d	60	55	4		
96A a	S K08	I E19 d - I E20 d	残60	45	9		
96A a	S K09	I E20 e	50	45			
96A a	S K10	I E19 a - I E20 b	245	95	38		
96A a	S D04	I E19 e - I E20 e			64		97N R01
96A a	S T01	I E19 g - I E20 g	残200	残110			
96A a	S T02	I E20 g	残95	残70			
96A a	S T03	I E19 g - I E20 g	210	残170			
96A a	S T04	I E20 g	160	140			
96A a	S T05	I E19 f - I E20 g	215	130			
96A a	S T06	I E20 f	残120	100			
96A a	S T07	I E20 f	残175	40			
96A a	S T08	I E19 f - I E20 f	残120	残65			
96A a	S T09	I E19 f - I E20 f					不定形
96A a	S T10	I E20 f	残60	残60			
96A a	S T11	I E19 c - I E20 c		残85			
96A a	S T12	I E20 c	残220	残90			
96A a	S T13	I E19 c - I E20 c	残110				
96A a	S T14	I E20 c	残195				
96A a	S T15	I E20 b - I E20 c	残170				
96A a	S T16	I E20 b					
96A b	S D01	I D20 o - I D20 p	残200	505	129		
96A b	S D02	I D20 n - I D20 o	残150	50	20		95E S D05、94F S D18、93B S D02
96A b	S K01	I D20 n	残80	80	28		
96A b	S T01	I D20 n - I D20 o	100	残25			
96A b	S T02	I D20 n - I D20 o	残90	80			
96A b	S T03	I D20 o	残45	残40			
96A b	S T04	I D20 o	残90	残60			
96A b	S T05	I D20 q	残75	残65			
96A b	S T06	I D20 q	残80	残25			
96A b	S T07	I D20 q - 20 r	残90	残80			
96A b	S T08	I D20 q - 20 r	残20	残20			
96A b	S T09	I D20 r	残65	残55			
96A b	S T10	I D20 r	残75	残25			
96A b	S T11	I D20 r	残150	残60			
96A b	S T12	I D20 r - 20 s	残40	残25			
97	S D01	II D2 t			42		
97	S B01	II D2 t - II E3 c	残155	残105	21		竈
97	S T101	II D2 t - II E2 a	残300				
97	S T102	II E2 a - II E2 b	340	残290			
97	S T103	II E2 b	残305	290			
97	S T104	II E2 b - II E2 c	残300				
97	S T105	II E2 d - II E2 e	残275				
97	S T106	II E3 d - II E3 e	255	残85			
97	S T107	II E3 d	残140	残30			
97	NR01	II E2 d - II E3 c					96A a S D04

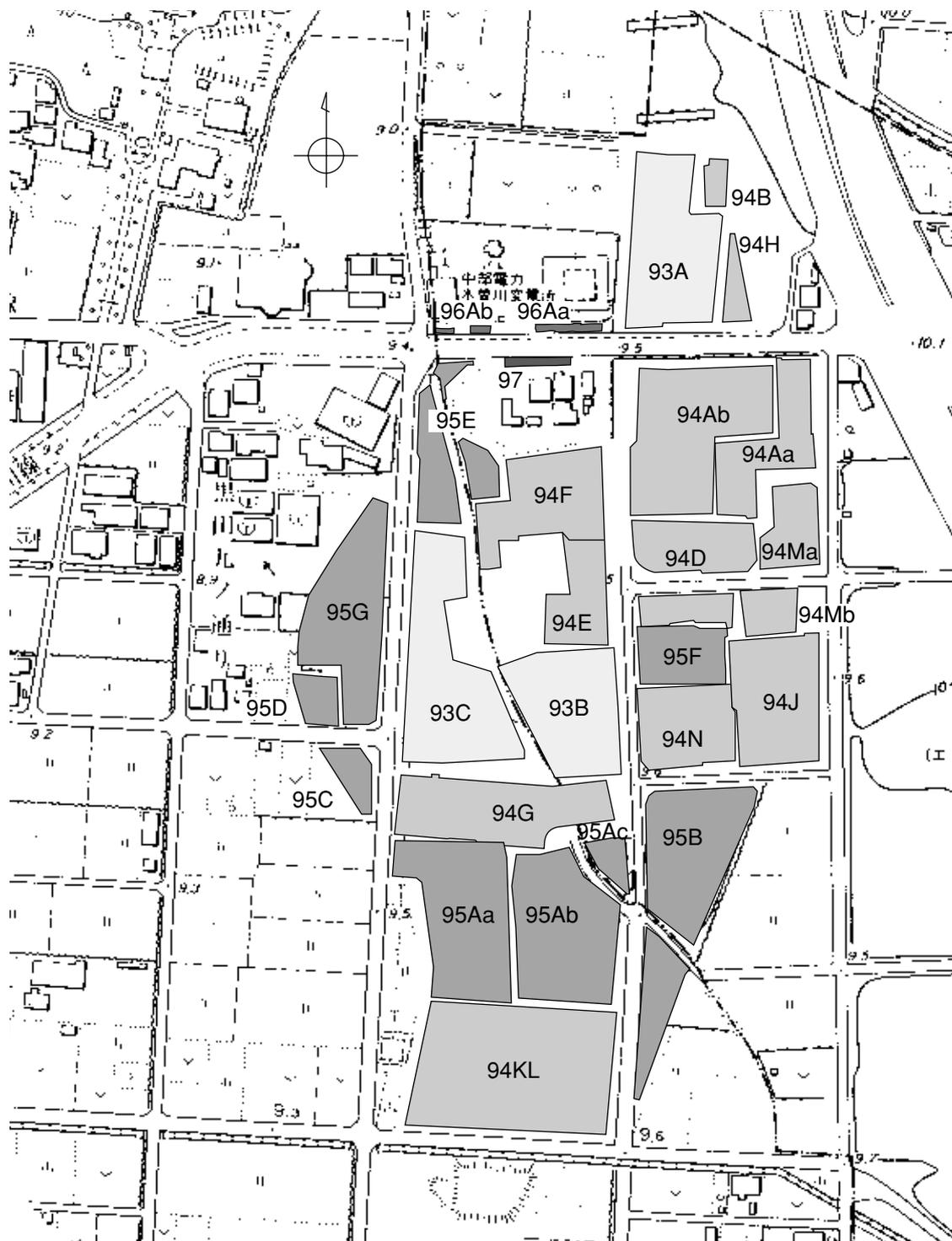
土器・陶器

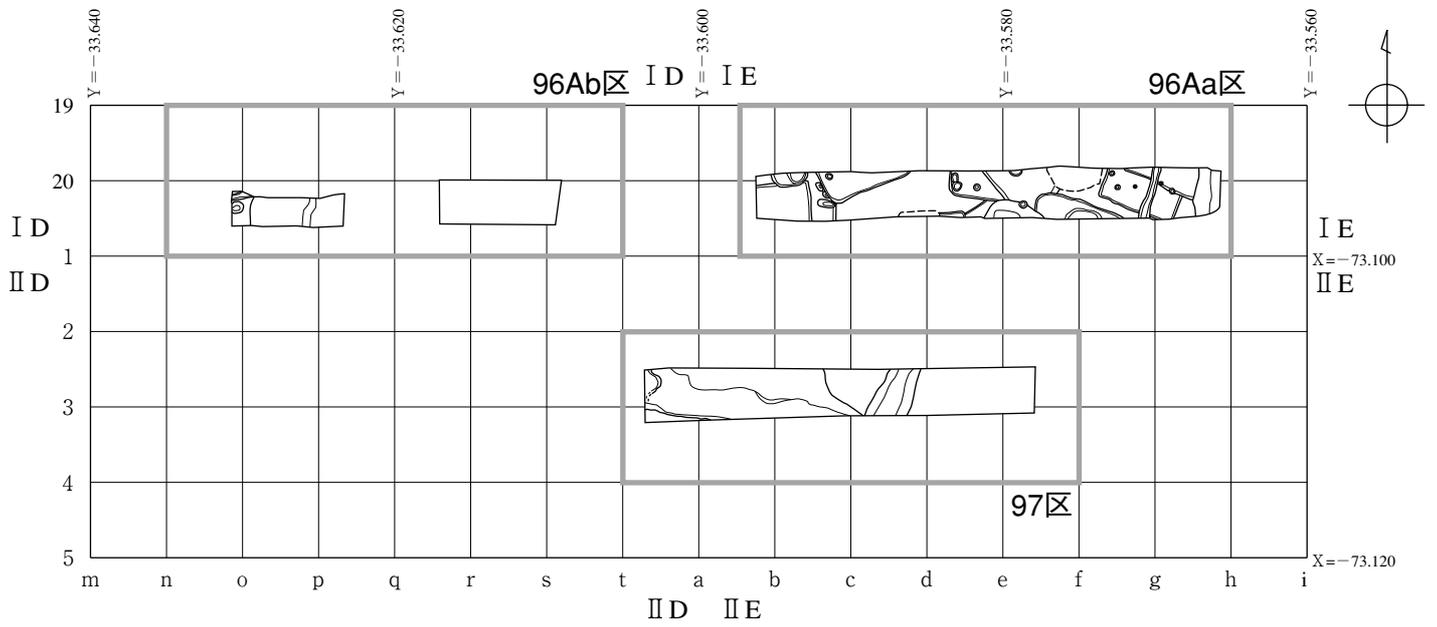
番号	登録番号	調査区	遺構	グリッド	種別	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	色調	備考
1	E-1	96A a	検出II	I E 20 e	土師器	小型高杯	廻間I～II式?			*2.1		淡黄色	断面黒色層
2	E-2	96A b	S T 08	I D 20 a	土師器	台付甕	廻間～松戸式			*5.2		橙色	砂粒多く含む、風化著しい
3	E-3	96A a	S K 09	I E 20 b	土師器	甕		15.6		*5.0	2/12	にぶい橙色	外面ヨゴレ
4	E-4	96A a	S B 05	I E 20 b	土師器	鍋(甌)						灰白色	把手部分
5	E-5	96A a	S K 10	I E 19 b	土師器	甕				*10.3	2/12	灰白色	外面スス
6	E-6	96A a	S B 06	I E 20 b	土師器	甕		18.6		*8.9	4/12	灰黄色	外面スス
7	E-7	96A a	検出I	I E 20 b	須恵器	杯	黒笹14号窯式併行	16.3	9.4	6.0	9/12	灰色	猿投窯産
8	E-8	96A b	S D 02	I D 20 o	須恵器	杯	黒笹14号窯式併行	15.0	8.4	6.0	3/12	灰色	猿投窯産
9	E-9	96A b	S D 02	I D 20 o	須恵器	蓋				*2.7		灰白色	
10	E-10	97	S B 01	II D 2 t	灰釉陶器	皿	折戸53号窯式	12.8	6.0	2.7	9/12	灰白色	猿投窯産
11	E-11	97	S B 01	II D 2 t	灰釉陶器	皿	折戸53号窯式		7.2	*5.3		灰白色	猿投窯産
12	E-12	97	S B 01	II D 2 t	灰釉陶器	椀	折戸53号窯式	16.0		*4.2	3/12	灰白色	猿投窯産
13	E-13	97	S B 01	II D 2 t	灰釉陶器	椀	折戸53号窯式		6.8	*4.2		灰白色	猿投窯産
14	E-14	97	S B 01	II D 2 t	土師器	甕		18.4		*4.7	2/12	にぶい黄橙色	外面スス
15	E-15	97	S B 01	II D 2 t	土師器	甕		18.6		*3.4	2/12	浅黄橙色	
16	E-16	96A a	S D 01	I E 20 g	灰釉陶器	椀			8.2	*3.2		灰白色	
17	E-17	96A a	S D 01	I E 20 g	灰釉系陶器	椀	第5型式新		8.0	*1.5		灰白色	尾張型
18	E-18	96A a	S D 01	I E 20 g	古瀬戸	縁釉小皿	後Ⅲ期	10.0		*2.3	2/12	淡黄色	尾張型
19	E-19	96A a	S K 02	I E 20 e	灰釉系陶器	椀	第5型式新		8.0	*1.9		灰白色	尾張型
20	E-20	96A a	S K 02	I E 20 e	灰釉系陶器	椀	第6型式		8.1	*1.8		灰白色	尾張型
21	E-21	96A a	S K 02	I E 20 e	灰釉系陶器	椀	脇之鳥窯期	13.4	4.8	3.7		灰白色	東濃型
22	E-22	97	S D 01	II D 3 t	灰釉系陶器	椀	第5型式古		7.6	*4.1		灰白色	尾張型、底部外面墨書?
23	E-23	97	S D 01		土師器	伊勢型鍋				*1.6	1/12	にぶい黄橙色	

土製品

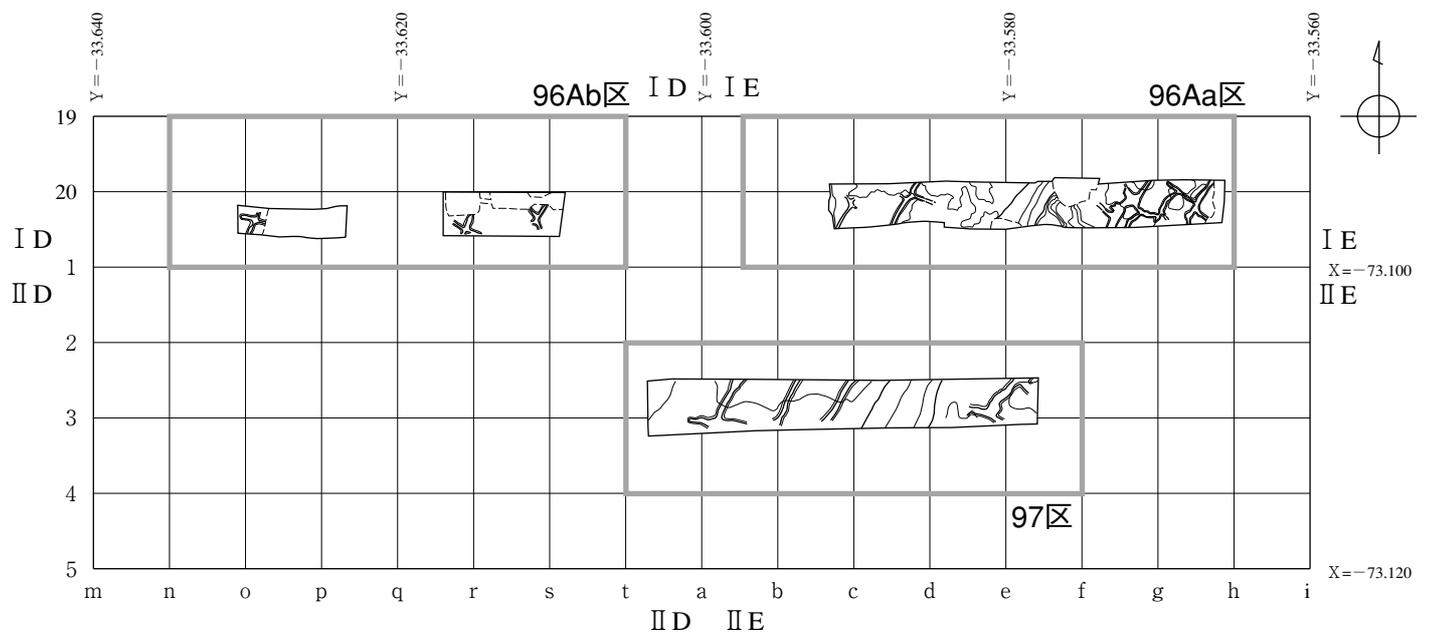
番号	登録番号	調査区	遺構	グリッド	種別	器種	分類 (使用部位など)	長袖 (cm)	半袖 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	色調	備考
24	E-24	96A a	S D 01	I E 19 g	灰釉系陶器	加工円盤	椀高台を含む底部	3.4	2.9	1.4	12.2	灰白色	尾張型
25	E-25	96A a	S K 02	I E 20 d	灰釉系陶器	加工円盤	椀高台を含む底部	3.5	2.8	1.35	11.0	灰白色	尾張型、側辺細かい打ち欠き
26	E-26	96A b	S D 02	I D 20 o	灰釉系陶器	加工円盤	椀高台を含む底部	2.2	2.1	1.4	9.3	灰白色	尾張型
27	E-27	96A b	S D 02	I D 20 o	灰釉系陶器	加工円盤	椀高台を含む底部	2.35	2.0	1.0	3.8	灰白色	尾張型、側辺粗い打ち欠き
28	E-28	96A a	検出I	I E 19 g	灰釉系陶器	加工円盤	椀高台を含む底部	3.0	2.2	1.4	9.5	灰白色	尾張型
29	E-29	96A a	検出I	I E 20 f	灰釉系陶器	加工円盤	椀高台を含む底部	3.0	2.6	1.7	8.7	灰白色	尾張型
30	E-30	96A a	検出I		灰釉系陶器	加工円盤	椀高台を含む底部	2.4	2.3	1.1	6.4	灰白色	尾張型、高台剥離
31	E-31	96A a	検出I		灰釉系陶器	加工円盤	皿底部中央付近	4.1	2.3	0.6	6.9	灰白色	東濃型、半円形
32	E-32	96A a	検出I	I E 20 f	灰釉系陶器	椀		8.2	6.1	1.9	58.0	灰白色	尾張型、内面墨痕、転用硯?
33	E-33	96A a	検出I	I E 20 e		土錘		2.5	1.4	*0.7	*2.1	明赤褐色	1/2欠損

図版1 調査区配置図 (1:2500)



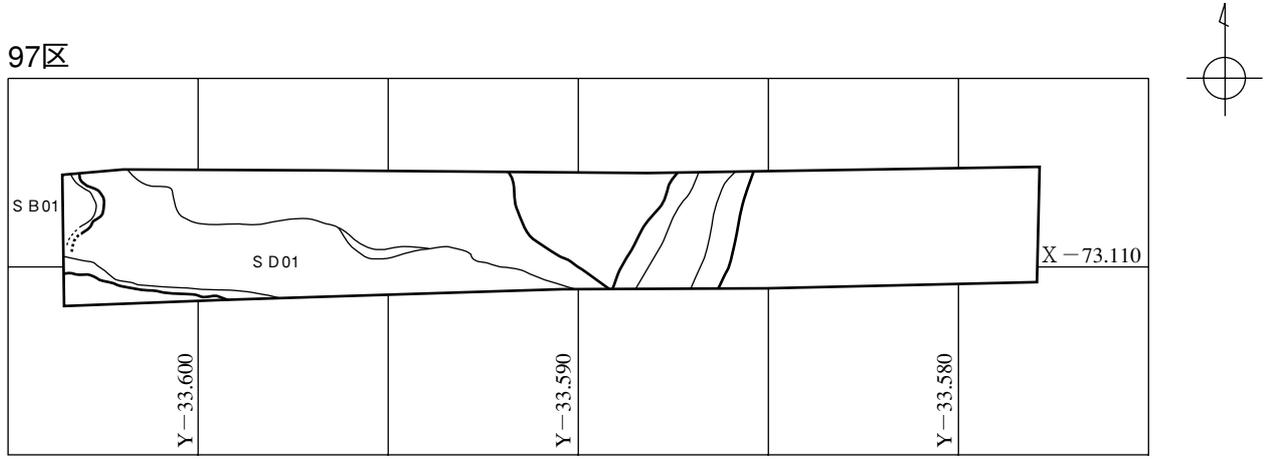
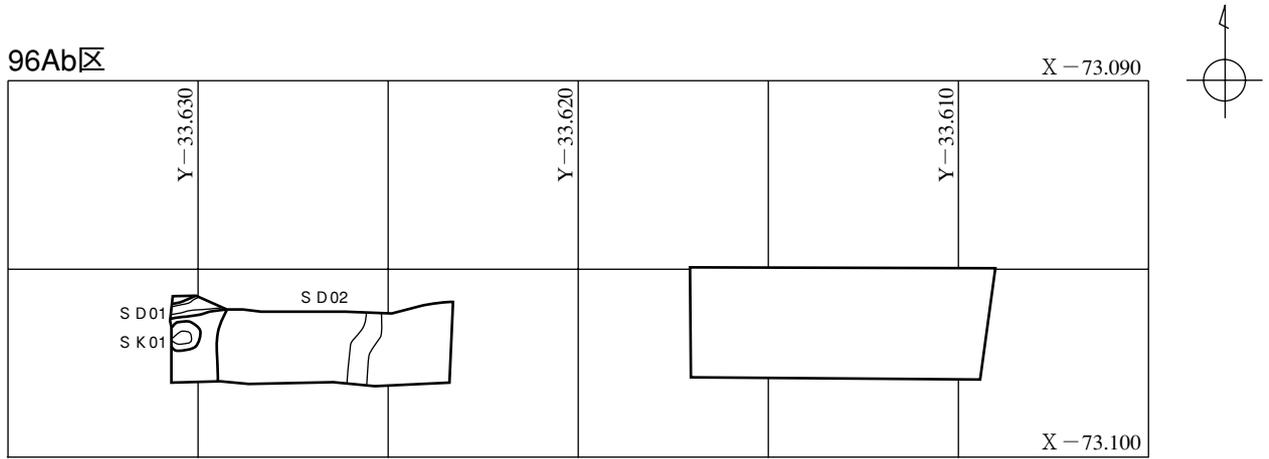
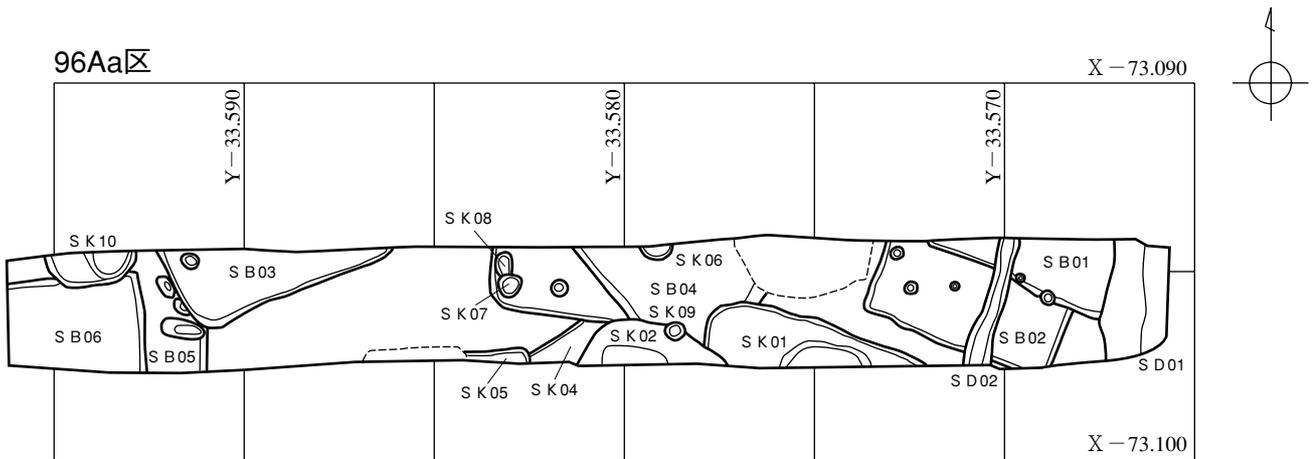


96・97区上面

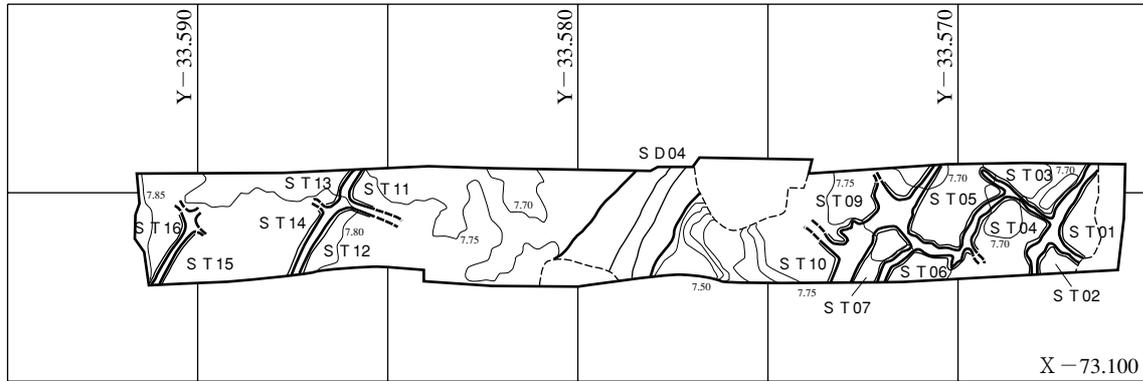


96・97区下面

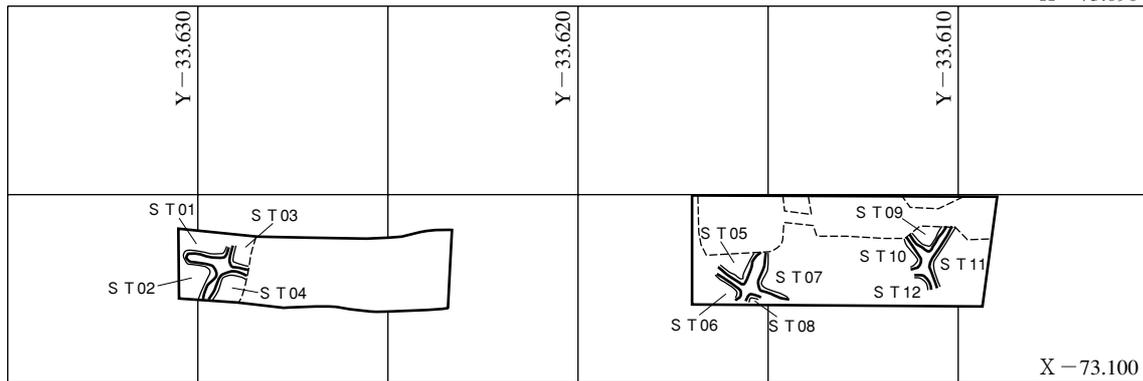
図版3 上面基本遺構図 (1:200)



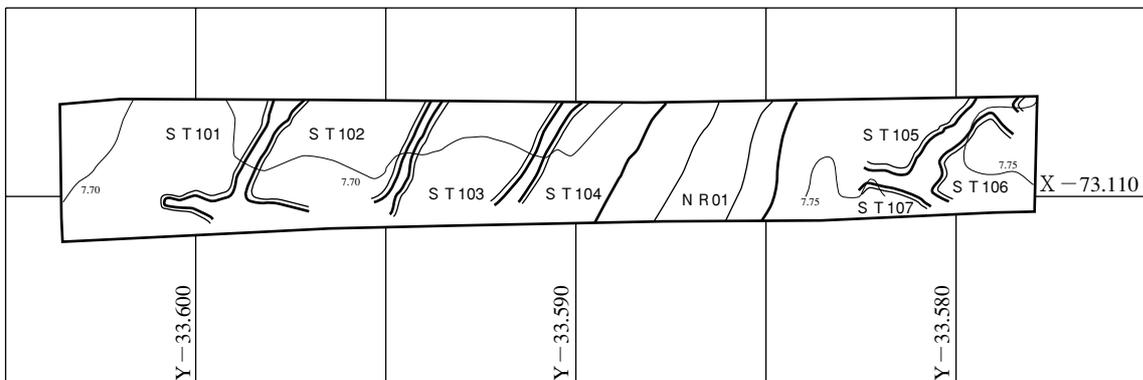
96Aa区



96Ab区



97区





左；96Aa区上面全景
西から

右；96Aa区上面東半
西から



左；96Aa区下面全景
西から

右；96Aa区下面東半
東から

左；97区上面全景
西から
右；97SD01
遺物出土状況



左；97区下面全景
東から
右；第5層水田
畦畔付近土層断面



97区窪地土層断面





報告書抄録

ふりがな	おかじまいせきⅢ・おおけいけだいせきⅡ
書名	岡島遺跡Ⅲ・大毛池田遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第94集
編著者名	松田訓・早野浩二・石黒立人・鬼頭剛・小野映介
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前々須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2001年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番					
おかじまいせき 岡島遺跡	にしおしえはらちよう 西尾市江原町	23213	55074	34度 51分 57秒	137度 05分 40秒	199806～ 199809	1,000㎡	県道 蒲郡碧南線 建設に伴う 事前調査
おおけいけだいせき 大毛池田遺跡	いちのみやしおおあざおお 一宮市大字大 け 毛 はぐりぐんきそがわ 葉栗郡木曾川 ちようくらだ 町黒田	23203	02096	35度 20分 20秒	136度 47分 50秒	199611～ 199612	400㎡	県道萩原 三条北方線 建設に伴う 事前調査
		23381				199711	150㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡島遺跡	集落	弥生	土坑・溝	弥生土器・石器	
大毛池田遺跡	集落	古墳 平安 室町	水田・窪地 竪穴住居 溝・井戸	土師器 土師器、須恵器、 灰釉陶器 土師器、灰釉系陶器、 施釉陶器	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第94集

岡島遺跡Ⅲ・大毛池田遺跡Ⅱ

2001年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社